小学校問題行動等防止プログラムに関する実践事例

高松市立下笠居小学校

関連項目：教育活動プラン⑤

主体的に生活をつくる

目的

本校の児童は、様々な学習場面および生活場面において自ら考え、判断し、主体的に行動する力が十分には育っていない。そこで、主体的にかかわる場面を意図的に設定し、主体的に生活をつくる力の向上を図ることにした。

内容

● 学級や各委員会と代表委員会のつながりを強める

運動会のテーマを話し合う代表委員会において、５年生から東日本大震災で被災された方々への支援をするべきではないかという提案がなされ、臨時の代表委員会を開くことにした。そこで、募金活動の実施を決定するとともに、各学年の役割分担を決め、準備を進めていった。募金を呼びかけるポスターやチラシ、横断幕の作成や、募金箱づくり、ポスターの掲示の依頼などの準備を進める中で、地域や保護者の方々の理解と支援をいただきながら、各学年が役割を果たすことができた。そして、運動会当日には、児童会運営委員とボランティアの児童が募金活動を行い、多くの義援金が集まった。その反応や成果の大きさに児童たちは、成果を喜ぶとともに、自分たちが主体的に考え、行動することで、大きなことも成し遂げられることを実感することができた。

また、６年生を送る会の計画を立てる代表委員会では、卒業式に向けて、学校を花で飾ったり、きれいに掃除をしたりして、きれいな学校で６年生を送り出したいという意見が美化委員会や栽培委員会から出された。教師が計画したことを実施するという姿勢から、自分たちの立場から６年生のためにできることを主体的に考え、発言する姿勢が育ってきていることを感じることができた。

● 継続的な募金活動の実施　～児童の活動にもＲＰＤＣＡサイクルを～

運動会後、募金活動についての反省を行い、そこで活動の継続の必要性を確認し、地域の夏祭りでも実施することにした。その際も、校内でボランティアを募り、募金を呼びかけるポスターやチラシを作る場を設定し、主体的に参加できるようにした。また、３回目の募金活動は、一日学習参観の日に、６年生がチャリティーショップという形で実施した。これは、２回目の募金活動後の反省において、ただ募金をお願いするだけでなく、より自分たちの力で募金を集めるとともに、募金してくださった方にも喜んでもらえる形にするべきであるという考えが出されたことによる。このチャリティーショップも大盛況で、６年生は自分たちの活動の成果の大きさに喜ぶとともに、そのような活動を計画・運営できたことに自信をもつことができた。また、そんな６年生の姿を見た５年生の保護者からは、来年もこのような活動をして、自分の子どもにもこのような６年生になってほしいという感想を寄せていただいた。子どもたちが主体的に考え、行動することで、保護者や地域にもその意識が浸透し、それがさらに児童の意識を高める力になることを再認識することができた。

● めざす学校像の設定とその実現に向けた取り組み

６月の代表委員会では、どんな学校にしたいか話し合い、「みんな元気でなかよしの学校」「きまりを守る学校」「きれいな学校」という３つのめざす学校像を設定した。その学校像の実現に向けて、各委員会ごとにできることを話し合い、全校生に提案した。その一例が、児童会から提案された「たてわり活動」と「あいさつ運動」である。たてわり活動では、下級生が楽しく活動できるように、進んで準備をしたり、気配りをしたりする６年生の姿や、その６年生をサポートしようとする５年生の姿、そして上級生に大切にされていることを感じ、うれしそうにする下級生の姿が見られた。学校生活を児童が自らの力でつくれるようにする際に、高学年児童のリーダーシップの育成は必要不可欠である。その高学年の児童が、主体的に活動できるようにするためには、相手意識や目的意識を明確に持てるようにするとともに、その反応を受け取れる仕組みをつくることが非常に重要だと感じた。また、現在では、たてわり班でのあいさつ運動を実施している。それ以前は、あいさつ委員を中心に学級単位で行っていたが、より「みんな元気でなかよしの学校」にするための方法を児童会で話し合った結果、２つの活動を結びつけることになったためである。このように、児童、特に高学年の児童に、明確な相手意識や目的意識を持たせることで、自らの活動を振り返って、改善点を見出し、さらなる工夫をしようとする姿勢につながることが分かった。

成果

こうした取り組みをすることで、まだ十分とは言えないが、特に高学年の児童の主体的に生活をつくろうとする意識が高まってきた。この高学年の変化は、徐々にではあるが中・低学年へと伝わっており、学校文化を創る基盤が徐々にできてきていると考えている。継続的な取り組みを行うことで、さらなる変化を生み出していきたいと考えている。